

Title	滞日中国人の社会的ネットワークと生活満足度
Sub Title	Social network and life satisfaction of Chinese residents in Japan
Author	竹ノ下, 弘久(Takenoshita, Hirohisa)
Publisher	三田哲學會
Publication year	2001
Jtitle	哲學 No.106 (2001. 3) ,p.123- 147
JaLC DOI	
Abstract	This paper aims to examine the causal relationship between social network and life satisfaction of Chinese residents who came to Japan for the last twenty years. I assume that immigrants depend on their personal network because they are unacquainted with the language, the institution and the culture of the host society. Prior researches about social network of immigrants focus on the role of ethnic network, which means the relations to people of the same ethnic origin. However, in the field of social network analysis, many researchers consider social network structures as important factors, and "density" is often used as a network item to measure egocentric network structure. Therefore, I examine the effects of ethnic characteristics in the network composition and density of egocentric network to the degree of life satisfaction. The result of multivariate analysis shows that the effect of ethnic characteristics in the network composition is limited, and density of egocentric network have an influence on the degree of life satisfaction.
Notes	特集変容する社会と家族 投稿論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000106-0125

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

滞日中国人の社会的ネットワークと 生活満足度

——竹ノ下 弘 久*——

Social Network and Life Satisfaction of Chinese Residents in Japan

Hirohisa Takenoshita

This paper aims to examine the causal relationship between social network and life satisfaction of Chinese residents who came to Japan for the last twenty years. I assume that immigrants depend on their personal network because they are unacquainted with the language, the institution and the culture of the host society.

Prior researches about social network of immigrants focus on the role of ethnic network, which means the relations to people of the same ethnic origin. However, in the field of social network analysis, many researchers consider social network structures as important factors, and “density” is often used as a network item to measure egocentric network structure. Therefore, I examine the effects of ethnic characteristics in the network composition and density of egocentric network to the degree of life satisfaction.

The result of multivariate analysis shows that the effect of ethnic characteristics in the network composition is limited, and density of egocentric network have an influence on the degree of life satisfaction.

* 慶應義塾大学メディア・コミュニケーション研究所研究員（社会学）

1. 本研究の課題

本稿は、ニューカマーの滞日中国人（戦後日本に移り住んだ中国大陸出身者）を対象に、1999年9月から12月にかけて筆者らによって行われた質問紙調査の結果をもとに、かれらが日本社会で取り結ぶ社会的ネットワークの構造が、生活満足度とどのような関係があるのかに注目する¹⁾。両者の関連を見ていくことで、移民がホスト社会で生活を構成していくとき、世帯外で取り結ぶパーソナル・ネットワークがいかなる役割を果たすのかについて議論を行う。生活満足度として、「子育て満足度」、「夫婦関係満足度」、「余暇生活満足度」、「日本社会での生活満足度」の4項目を取り上げ、これらの生活満足度がいかなるネットワーク構造に左右されるのかについて検討する。

本研究で両者の関連に注目する理由は、国境を越える移動を果たす人ほど、移住先の社会で生活する上で、よりネットワークのなかに埋め込まれた存在であると思われるからである。国民国家ごとに各地域が個別に構成される社会において、ある特定の国民国家は、そこに以前から居住していた人々を前提に、様々な社会的諸制度を編成する。そのため、国家の境界を越えて移動する「移民」は、社会生活のあらゆる領域にわたって周辺化の効力を受ける。「移民」が、ネットワークにより埋め込まれた存在であるということは、ネットワークに依存することで、かれらは様々な社会的障壁を迂回することが可能となり、迂回するためのソーシャル・サポートの資源をパーソナル・ネットワークから調達しうることを意味する。

だが他方で、「移民」がネットワークからのサポートの調達を必要とするのは、移住初期の段階に限定されており、移住後、その社会への「適応」の度合いを増すにつれ、ネットワークへの依存・包絡を薄めていくという議論もあるかもしれない。しかし、「移民」が、配偶者との結婚、子どもの出産、育児を契機に、ホスト社会との関わりを密接なものとするこ

とで、一層の社会的障壁に直面し、ネットワークへの依存、包絡を深めていくということも予想される。後者の立場にたてば、ネットワーク分析のパイオニアとされる E. ボットの言うように、国境を越える移動を果たす人々にとっても、いや移動を果たす人々であるからこそ、移民の社会的環境は、ネットワーク概念によってこそ把握できるといえるのではないだろうか。

2. 先行研究と本研究の仮説

(1) 移民研究におけるネットワークへの注目

既存研究によれば、ホスト社会への適応に対する移民の社会的ネットワークは、「資源としてのネットワーク」や「拘束としてのネットワーク」という視点から議論されてきた。移民が取り結ぶパーソナル・ネットワークは、移民がホスト社会で生活するうえで必要な物的資源（住居等）、情報的資源（職業に関する情報、医療や社会サービスに関する情報等）を提供したり、かれらの余暇生活を充実させたり、情緒的サポートを供給したりするという (Boyd 1989; Massey et al. 1987)。しかし他方で、移民ネットワークへの過度の依存は、移民のホスト社会からの孤立化、コロニー化を帰結するという議論もなされている。つまり、移民が過度に、親族や出身地域の言語や文化を共有するものだけにネットワークを限定することで、かれらがホスト社会から孤立するのではないかと論じられてきた²⁾。こうした議論を一般化すると、あらゆるエスニック・ネットワークは、移民のホスト社会からの隔離をもたらすという結論を導くが、これには反論も多い。たとえば、エスニック・ネットワークを基盤とした組織形成は、移民とホスト社会とを架橋する重要な媒体であり、ホスト社会に関する接触や情報を供給することで、ホスト社会に移民を統合する機能を持つという議論もある³⁾。アメリカを中心とする移民ネットワークの研究は、移民が取り結ぶエスニック・ネットワークに注目し、それが、移民の

ホスト社会の適応に際していかなる機能を果たしているのかに焦点を当ててきた。

日本の移民ネットワークに関する研究についても、ネットワーク・メンバーのエスニシティに注目しており、アメリカの研究と同様の傾向がみられる。日本の研究では、南米地域出身の日系人を対象に行われたものが多い。エウニセ・コガ(1996)や都築くるみ(1995)の研究によれば、日系人は多くの局面で日系人同士のネットワークに依存しており、日系人ネットワークへの過度の依存は、そのネットワークを一層強め、そうした生活領域に包絡されていく状況が指摘されている⁴⁾。

中国人を対象に行われた研究としては、田嶋淳子(1998)や伊藤泰郎(1997)の研究がある。田嶋は、東京都池袋地区について、1988年、90年、94年の3回にわたって、中国系ニューカマーズも含むアジア系外国人を対象に調査を行っている。最新の94年調査の結果では、かれらが生活を営むうえで、同一の民族・エスニシティに属する人たちを中心とした友人・知人とのネットワークの重要性が指摘されている。(田嶋 1998: 100-104) また、言葉に不自由な人々にとっては、同国人同士のつながりが日本での生活をすすめるうえで不可欠の要素であるという。回答者251名のうち、83.3%が同国人と友人関係を形成しており、エスニック・ネットワークの重要性がここからもうかがえる。

他方で伊藤の研究では、滞日年数が比較的短い単身者である中国人就学生を対象に、調査が行われた。調査結果によれば、来日後形成した日本人との紐帯を持つ人ほど、生活圏の拡大を経験し、「帰国希望」者が他のカテゴリーよりも顕著に少なくなっているという。伊藤の研究を見ると、来日後形成した日本人との紐帯が、中国人の日本社会への参加、統合を促進する効果をもっていることが示唆されている。

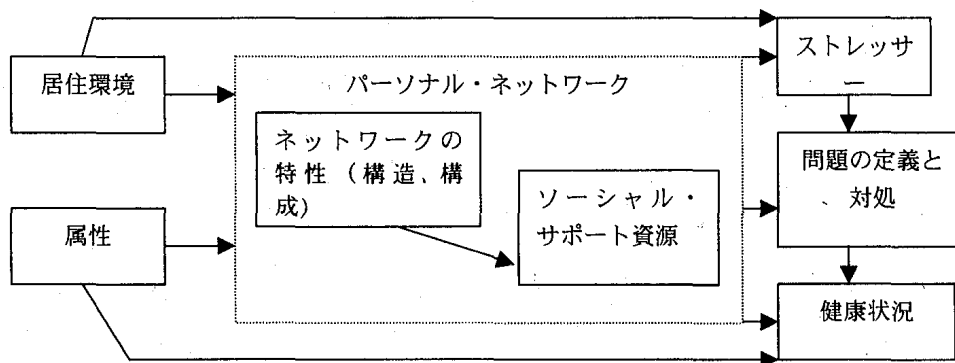
(2) ネットワーク研究とソーシャル・サポート

移民ネットワークにかんする既存研究の多くは、ホスト社会への適応、参加に際してエスニックなネットワーク特性を重視するが、移民ネットワークへのアプローチはそれだけにとどまらないだろう。これまでの社会学におけるネットワーク研究は、ネットワーク構造の規定力に大きな関心を払ってきたからである。

ネットワーク研究のなかで本研究の課題と大きく関連するものが、ネットワークとソーシャル・サポートとの関連を問う研究である⁵⁾。

当初のソーシャル・サポート研究⁶⁾では、ソーシャル・サポートと心理的安寧感との関係を問う研究が主流であり、サポートが心理的安寧感に及ぼす効果の検証が、注目されてきた (Wellman and Gulia 1999)。これらの研究は、サポーティブな紐帯ばかりに注目し、個人間の親密なネットワークから、常にサポート資源が動員可能であると、無条件に仮定してきた。そのため、これらの研究は、サポートが埋め込まれている構造や文脈を等閑視してしまう欠点を有している。ネットワーク分析の立場にたつと、ソーシャル・サポート研究に必要なことは、あらゆるネットワークに単純にサポートを想定することではなく、いかなる特徴をもつネットワークのとき、どのようなサポート資源の提供がなされるのかを問うことではないだろうか (Hall and Wellman 1985)。

ウェルマンとガリアは、ネットワークとソーシャル・サポートとの関連を問うとき、ネットワーク特性のうち次の4つの次元に注目する必要があると述べる。第1に、レンジであり、そこでは、ネットワークの大きさや異質性が問題となる。レンジが高いことは、ネットワークがより多くの資源、より多様な資源を利用可能にしていることを意味する。第2に、接触の利用可能性である。高い利用可能性は、道具的支援の遂行を容易にする。第3に、ネットワークの緊密度である。ネットワークメンバーが、義務とコントロールの及ぶ緊密な規範的な紐帯によって枠づけられている



Hall and Wellman (1985: 34)をもとに、筆者が一部修正。

図1 社会的ネットワーク、ソーシャル・サポート、ウェルビーイングとの関連

か、関心を共有する緩やかで自発的な紐帯によって枠づけられているかが、ここで問題となる。第4に、構成である。ネットワークを構成するメンバーの属性要因が、検討される (Wellman and Gulia 1999: 85-86)。

ネットワーク論においては、図1のように、ウェルマンとガリアが整理した4つのネットワークの特性が、ソーシャル・サポートをめぐる資源の入手可能性、ストレッサーの発生状況、問題の定義と対処、心理的なディストレスにいかなる効果を及ぼしているかが検証されてきたのである。

(3) 本研究のモデル

移民研究においては、移民が取り結ぶ社会的ネットワークのうち、エスニックなネットワーク特性が注目され、とくに、同国人や同じ出身地域の者同士で取り結ぶネットワークの効果に研究の焦点が当てられてきた。しかしながら本研究は、従来の移民研究のようにネットワークのエスニックな特性や同国人ネットワークの効果だけに注目するのではなく、ネットワーク研究で開発、発展してきた複数のネットワーク特性を分析の着眼点として用いることにしたい。

本研究が、滞日中国人の生活満足度を規定する要因として重視するの

が、ネットワークの構成とネットワークの緊密度である。従来の移民研究では、ネットワークの構成として、ネットワーク・メンバーのエスニシティばかりに焦点が当てられてきた。本研究ではこれを、滞日中国人の生活満足度を規定する要因の1つと考え、それ以外の構成要因としてメンバーのエスニシティに関係なく、メンバーが日本に来てから知り合いか否かという要素に注目することにした。これは、移民が移住先の社会に「適応」していくに際して、移住以前から構築している関係、または、移住先で構築した関係が重要な意味を持つと考えられるからである。

他方で、本研究が注目するネットワークの緊密度として考えるのが、ネットワークの密度である。エゴセントリック・ネットワークを想定したとき、特定の人物を囲むネットワークを抽出し、抽出されたネットワークのノード間の紐帯の数や強さから、密度は測定される(安田1997)。ネットワーク構造のなかで、密度(結合度)の効果に注目した古典的な研究がボットによってなされている(Bott 1971)。野沢慎司の整理に依拠すると、ボットの研究が導き出した仮説とは、夫婦の役割分離の程度が、世帯外に広がる社会的ネットワークの結合度(密度)によって直接的に変化する、というものであった。こうしたメカニズムを成立させる背景には、密度の高い緊密なネットワークは、ネットワーク内のメンバー間に規範的なコンセンサスを生じやすく、そのためそれが各メンバーに対し、相互に接触を保ち、援助しあう方向へとインフォーマルな圧力を加える。他方で、密度の低い緩やかなネットワークは、ネットワーク内に規範の一貫性が生じにくいという(野沢1996: 80)。このようなボットの仮説について、後続の研究はその基本的問題点を明らかにし、ボット仮説に多くの修正点を付け加えていった。ウェルマンもまた、ネットワークとソーシャル・サポートとの関係をみると、規模や密度ばかりに依拠しては、ネットワークの構造的複雑性を捉えられないと批判する(Wellman 1985: 37-38)。とはいえ本研究は、移民ネットワークに関する先行研究が、こうし

たネットワーク構造にあまり注目してこなかった状況をかんがみ、ネットワーク構造の基本的な要素の1つとして密度を取り上げることにする。

このように、本研究は、先行研究の状況をかんがみ、ネットワークの構成とネットワークの緊密度、具体的にはネットワーク・メンバーのエスニシティ、日本に来てから知り合ったメンバーかどうか、ネットワークの密度という3つの要素に注目し、それらの要因が、本研究で取り上げる生活満足度（子育て満足度、夫婦関係満足度、余暇生活満足度、日本社会での生活満足度）とどのような関係にあるのか、以下ではみていく⁷⁾。

3. データと変数

(1) 調査の概要

本研究は、以下の分析を進めるにあたって、「在日中国人の家族生活と社会的ネットワークにかんする調査」によって収集されたデータを使用する⁸⁾。本調査では、母集団を「日本にある滞日中国人に関係する団体と何らかのつながりを有する人たち」とし、主として関東で活動する各種の滞日中国人団体に調査協力を依頼し、承諾を得られた団体を通じて調査を実施した⁹⁾。母集団をこのように設定したのは、次の理由による。第1に、滞日中国人全体を代表する名簿が存在せず、質問紙調査を実施する場合、特定の層に対象を限定しなければならない。第2に、滞日中国人の社会的ネットワークの解明という調査目的をかんがみると、ネットワークを一定程度取り結んでいると思われる人たちを対象とする方が、移民ネットワークの機能をより明確にすることが可能となる。そして、滞日中国人に関係する団体と何らかのつながりをもつ人たちは、ネットワークを一定程度有している人たちではないかと考えたからである。

調査票は、最初に日本語で設計され、最終的に中国語に翻訳した。調査は、1999年9月から12月にかけて行われ、配票総数が868で、有功回収総数は148であった。なお、本調査は、中国大陸出身者の滞日中国人

を対象として設計されており、中国大陸以外の地域から来ている中国人（香港、台湾出身者等）や中国帰国者をサンプルから除外した結果、分析に用いるサンプル総数は139となった。

(2) 対象者の特性

本研究で依拠する調査対象者の特性について述べておきたい(N=139)。性別では、男性38.8%、女性61.2%であり、サンプル構成が女性にやや偏っている。年齢別に見ると、20代12.9%、30代57.6%、40代21.6%、50代2.9%、不明5.0%となっており、30代が最も多く全体の半数をしめる。

最終学歴では、高卒8.6%、短大卒15.8%、大卒以上75.5%となっており、大卒以上が全体の4分の3をしめる。とはいえ、これは、他の調査結果と比較すると著しく偏りがあるわけではない。たとえば、1993年に実施された「川崎市外国籍市民意識実態調査」（以下「川崎市調査」）によると、「中国・台湾・香港」出身の外国籍住民の学歴構成では、「大卒以上」が59.3%にも達している。現在、日本における外国籍居住者の合法的な就労資格は、専門的な知識、技能を前提とした職業に限定されており、日系人などの例を除けば、外国籍住民は、日本で合法的に就労するためには、大卒以上のホワイトカラーであることが要求される。日本の入管体制を考えると、アジア系外国人をはじめとする人たちの高等教育修了者の比率の高さもうなずける。

職業では、有職者は全体の54.7%であり、そのうち専門66.2%、管理2.7%、事務12.2%、販売・サービス10.8%、技能・労務8.1%であった。本調査データは、職業においても、専門職の比率が著しく高い。しかし、日本で合法的に就労可能であるのは、専門的な知識、技能を前提とした職業に限定されているという日本の入管体制をかんがみると、このデータの専門職の比率の高さも妥当なものと思われる。先の「川崎市調査」で

も、「中国・台湾・香港」の「専門技術管理職」の比率は、40.9%となっており、ここでも専門職の比率は高い。

このように、1993年に川崎市で実施された調査と比較すると、本調査は、学歴では「大卒以上」、職業では「専門職」に偏りがみられるとはいえ、滞日中国人全体の動向から大きく逸脱するものではないと考える。

(3) 変数

分析に用いる変数の具体的内容は次のとおりである。

1) 被説明変数

- ・家族生活に関連した生活満足度

「子育て・育児」、「夫婦関係」、「余暇の過ごし方」、「日本での生活全般」の4項目についてそれぞれ、「満足」(5点)、「どちらかといえば満足」(4点)、「どちらともいえない」(3点)、「どちらかといえば不満」(2点)、「不満」(1点)とたずねて、それぞれの項目に数値を与え変数として用いた。

2) 説明変数

- ・コントロール変数

性別：男性を0、女性を1とコード化。

滞日年数：滞日年数の実数を用いた。年齢を同時に投入することも考えたが、多重共線性の可能性があったため、年齢を除外し、滞日年数を用いることにした。

学歴：教育年数におきかえた。

就業状況：有職を0、無職を1とした。

世帯収入：「300万円未満」(300点)、「300～400万円未満」(350点)、「400～500万円未満」(450点)、「500～700万円未満」(600点)、「700～900万円未満」(800点)、「900～1100万円未満」(1000点)、「1100～1500万円未満」(1300点)、「1500万円以上」(1500点)とたずねたも

のに、カッコ内の数値でおきかえ、これを変数として用いた。

・ネットワーク変数

回答者のエゴセントリック・ネットワークを把握するにあたっては、回答者に「現在日本に住んでいる最も親しい人（家族は除く・親戚は含む）を3人思い浮かべて」もらい、その3人それぞれの属性、接触頻度、エスニシティ、密度等を測定した。

ネットワーク・メンバーのエスニシティ：

「その3人が次のうち、どれにあてはまるか」として、「中国人」、「中国帰国者」、「台湾人」、「香港・マカオ出身者」、「日本人」、「その他の外国人」のいずれかで答えてもらったところ、「その他の外国人」という回答はなかった。そこで、「中国人」から「香港・マカオ出身者」までの回答を「中国人」として一括して0とコード化し、「日本人」を1とコード化

表1 分析に用いた変数の基本統計量

	N	平均値	標準偏差
子育て満足度	100	3.91	0.75
夫婦関係満足度	108	4.19	0.82
余暇生活満足度	139	3.17	1.01
日本社会での生活満足度	139	3.34	0.79
性別	139	0.61	0.49
滞日年数	139	7.28	4.43
教育年数	139	16.71	2.61
就業状況	139	0.45	0.50
世帯収入	139	655.04	302.06
エスニシティ	121	0.62	0.97
知り合った場所	121	2.29	0.79
密度	122	2.48	2.57
中国で知り合った中国人数	119	0.66	0.78
日本で知り合った中国人数	119	1.71	1.02
日本で知り合った日本人数	119	0.58	0.93

注) ネットワーク以外の変数は、欠損値を最頻値で代替。「子育て満足度」については、18歳未満の子どもがいる回答者に限定。「夫婦関係満足度」については、有配偶者でかつ、日本で配偶者と同居している人に限定。

表2 分析に用いる

	育児満足度	夫婦関係満足度	余暇生活満足度	日本社会生活満足度	性別	滞日年数
育児満足度		89	100	100	100	100
夫婦関係満足度	.317**		108	108	108	108
余暇生活満足度	.219*	.327**		139	139	139
日本社会生活満足度	.290**	.140	.476**		139	139
性別	-.023	.080	.078	.191*		139
滞日年数	-.112	-.067	.222*	.220*	.020	
教育年数	.201*	.168 ⁺	.090	.002	-.418**	.015
就業状況	.044	.212*	-.084	-.042	.251**	-.366**
世帯収入	.005	.013	.079	.124	.170*	.402**
エスニシティ	-.180 ⁺	-.003	.102	.234**	.111	.351**
知り合った場所	-.037	.060	.186*	.243**	.255**	.188*
密度	.244*	.091	-.199*	-.190*	-.139	-.092
中国で知り合った中国人数	.034	-.063	-.174 ⁺	-.246**	-.238**	-.203*
日本で知り合った中国人数	.142	.047	.042	-.030	.088	-.172 ⁺
日本で知り合った日本人数	-.182 ⁺	-.004	.118	.245**	.117	.354**

注) 相関行列のうち、下三角部分がピアソンの相関係数、上三角部分がサンプル数。

⁺ p<.10 * p<.05 ** p<.01

した。そして、それを3人分足し合わせたものを変数として用いた。したがってその変数は、「中国人3人、日本人0人」(0点), 「中国人2人、日本人1人」(1点), 「中国人1人、日本人2人」(2点), 「中国人0人、日本人3人」(3点) という形になった。最小値は0, 最大値は3である。日本に来てから知り合ったメンバーか:

その3人が、「いつからの知り合いか」ということで、「中国にいたときから(日本にくる前から)」(0点), 「日本に来てから」(1点) とたずねたものにカッコ内の数値を与え、3人についての合計得点を変数として用いた。最小値は0, 最大値は3である。

密度:

密度を測定するにあたっては、紐帯の有無だけでなく、紐帯の強さにも注目して、操作化し、質問文を構成した。「3人同士はどのような関係ですか」として、「きわめて親しい」(3点), 「ふつうに親しい」(2点),

変数の相関係数

教育年数	就業状況	世帯収入	エスニ シティ	知り合っ た場所	密 度	中国で知 り合った 中国人数	日本で知 り合った 中国人数	日本で知 り合った 日本人数
100	100	100	89	88	88	88	88	88
108	108	108	94	94	93	94	94	94
139	139	139	121	121	122	119	119	119
139	139	139	121	121	122	119	119	119
139	139	139	121	121	122	119	119	119
139	139	139	121	121	122	119	119	119
	139	139	121	121	122	119	119	119
-.099		139	121	121	122	119	119	119
-.025	-.147 ⁺		121	121	122	119	119	119
-.131	-.067	.065		119	122	119	119	119
-.316**	-.049	.026	.248**		122	119	119	119
.024	.006	-.036	-.179 ⁺	-.136		118	118	118
.304**	.032	-.057	-.342**	-.961**	.192*		119	119
-.109	.038	-.007	-.691**	.503**	.028	-.443**		119
-.149	-.076	.034	.974**	.303**	-.144	-.337**	-.671	

「知っているだけ」(1点), 「知り合いではない」(0点)と質問したものにカッコ内の数値を与え, 3人についての合計得点を算出し, それを変数として用いた。最小値は0, 最大値は9である。

ネットワーク変数については, 一部でさらに分析を進めるために, 「日本に来てから知り合ったメンバーか」と「ネットワーク・メンバーのエスニシティ」の両変数を組み合わせて, 「中国にいたときから知り合いの中国人数」, 「日本に来てから知り合った中国人数」, 「日本に来てから知り合った日本人数」の3変数を構成した。いずれも最小値は0, 最大値は3である。

なお, 「中国にいたときから知り合いの日本人数」は, 分布が非常に偏っていたため, 分析から除外した。

分析に用いる変数の平均値, 標準偏差, 変数間の相関係数については, 表1と表2のとおりである。

4. 結 果

分析結果は、「子育て満足度」、「夫婦関係満足度」、「余暇生活満足度」の3つについて示し、分析モデルを、属性変数だけのモデル（モデル1）、ネットワーク変数を追加投入したモデル（モデル2）ごとに係数を表示した¹⁰⁾。

「子育て満足度」からみていくと、モデル1では、教育年数だけが正の効果を示しており、教育年数が高いものほど子育て満足度も高い傾向がみられる。モデル2で、ネットワーク変数が追加投入されると、「密度」だけが有意な効果を及ぼしている。密度が高いネットワークに包絡されている人ほど、子育て満足度も高い結果となっている。

「夫婦関係満足度」に注目すると、モデル1と2ともに、教育年数と就業状況のみが有意な効果を持ち、ネットワーク変数はいずれも有意な効果を及ぼしていない。夫婦関係満足度は、今回投入したネットワーク変数に

表3 生活満足度の重回帰分析

	子 育 て 満 足 度		夫 婦 関 係 満 足 度		余 暇 生 活 満 足 度		日 本 社 会 生 活 満 足 度	
	1-1	1-2	2-1	2-2	3-1	3-2	4-1	4-2
性別	.102	.157	.128	.117	.159	.096	.213*	.148
滞日年数	-.117	-.062	-.044	-.078	.203 ⁺	.153	.226*	.124
教育年数	.294*	.318*	.329**	.392**	.183 ⁺	.223*	.090	.153
就業状況	.051	.042	.213 ⁺	.214 ⁺	-.058	-.043	-.023	-.010
世帯収入	.001	-.027	.014	.031	-.016	.007	.027	.065
エスニシティ	—	-.146	—	.011	—	-.017	—	.126
知り合った場所	—	.081	—	.179	—	.193 ⁺	—	.204*
密度	—	.245*	—	.094	—	-.164 ⁺	—	-.112
N	87	87	93	93	118	118	118	118
R2	.079	.161	.124	.160	.086	.147	.101	.175
F 値	1.396	1.871 ⁺	2.466*	1.996 ⁺	2.115 ⁺	2.347*	2.524*	2.896**
ADJ-R2	.023	.075	.074	.080	.045	.084	.061	.115

⁺ p<.10 * p<.05 ** p<.01

限っていえば、ネットワークといった社会関係資本によって左右される変数というよりは、個人の社会的地位によって左右される変数であることが明らかになっている。

「余暇生活満足度」をみていきたい。コントロール変数で有意な効果を及ぼしているのは、モデル1では滞日年数と教育年数であったが、モデル2では教育年数のみになっている。他方で、ネットワーク変数で有意な効果を及ぼしているのは、「知り合った場所」と「密度」である。「知り合った場所」については、日本で知り合った人が多いほど、そして、ネットワークの密度が低いほど、「余暇生活満足度」も高いことが明らかになっている。この結果は、「子育て満足度」に対する密度の効果と比較すると、非常に興味深い。なぜなら、「子育て満足度」については、密度が高いほど満足度も高い傾向が見られたのに対し、「余暇生活満足度」については、それらとは逆の傾向が析出されたからである。

最後に、「日本での生活全般の満足度」に注目すると、モデル1では性別と滞日年数が有意な効果をもつが、ネットワーク変数を追加投入すると、これらの変数は独自の効果を消失する。他方で、追加投入されたネットワーク変数のうち、「知り合った場所」だけが、有意な効果をもっている。日本で知り合った人が多い人ほど、「日本での生活全般の満足度」も高い傾向が見られる。

以上の結果では、ネットワーク変数のうち、「密度」と「知り合った場所」が、いくつかの従属変数に対して有意な効果を持つのに対し、親密なネットワークを構成する人が、日本人であるか、中国人であるかは、生活満足度を何ら左右していない。では、本当にエスニックなネットワーク特性は、中国人の生活満足度を何ら左右していないのであろうか。「知り合った場所」が「余暇生活満足度」と「日本での生活全般の満足度」を左右しているが、このなかにエスニックなネットワーク特性の効果が潜在している可能性はないのであろうか。そうした点を再度見ていくために、

表4 余暇生活満足度, 日本社会生活満足度の重回帰分析

	余暇生活満足度			日本社会生活満足度		
	5-1	5-2	5-3	6-1	6-2	6-3
性別	.107	.122	.126	.159	.188 ⁺	.176 ⁺
滞日年数	.154	.203 ⁺	.166	.170 ⁺	.212*	.140
教育年数	.215*	.182 ⁺	.180 ⁺	.138	.083	.107
就業状況	-.050	-.053	-.059	-.012	-.023	-.024
世帯収入	.000	-.015	-.006	.045	.030	.054
密度	-.155 ⁺	-.180*	-.174 ⁺	-.116	-.148	-.130
中国で知り合った中国人数	-.154	—	—	.208*	—	—
日本で知り合った中国人数	—	-.095	—	—	.009	—
日本で知り合った日本人数	—	—	.042	—	—	.177 ⁺
N	118	118	118	118	118	118
R2	.136	.125	.118	.157	.122	.148
F 値	2.483*	2.255*	2.111*	2.937**	2.190*	2.732*
ADJ-R2	.081	.070	.062	.104	.066	.094

⁺ p<.10 * p<.05 ** p<.01

「エスニシティ」と「知り合った場所」という2つの変数を組み合わせることで、「中国で知り合った中国人数」、「中国で知り合った日本人数」、「日本で知り合った中国人数」、「日本で知り合った日本人数」の4変数を再構成し、「知り合った場所」が有意な効果をもっていた「余暇生活満足度」と「日本での生活全般の満足度」との関係について再度重回帰分析を用いて確かめてみたい。ただし、「中国で知り合った日本人数」については、分布が極端に偏っていたため、分析から除外した。

表4を見ると、「余暇生活満足度」については、「中国で知り合った中国人数」、「日本で知り合った中国人数」、「日本で知り合った日本人数」いずれも、従属変数に対して有意な効果を及ぼしていない。先の結果と合わせて考えると、「余暇生活満足度」については、親しく付き合う人が中国人、日本人に関わらず、日本で親しく付き合う人が多いほど、「余暇生活満足度」が高いといえる。他方で、「日本での生活全般の満足度」については、「中国で知り合った中国人数」が多いほど、満足度が低く、「日本で

知り合った日本人数」が多いほど満足度が高い。「日本での生活全般の満足度」の場合、親しく付き合う相手が中国で知り合った人か、日本で知り合った人かということだけでなく、その人が中国人か、日本人かによっても、生活満足度が左右されていることが明らかになっている。

5. 議 論

(1) エスニックなネットワーク特性の効果の限定性

本研究では、エスニックなネットワーク特性（親密なネットワークの構成者が中国人か日本人か）の生活満足度への効果を検証したところ、形式的に重回帰分析に変数を投入しただけでは、両者に関連を見出すことはできなかった。しかし、「知り合った場所」ごとに変数を構成しなおしたところ、「日本での生活全般の満足度」にかぎって、「中国で知り合った中国人数」が多いほど、満足度が低く、「日本で知り合った日本人数」が多いほど、満足度が高い傾向がみられた。

「中国で知り合った中国人数」が多い回答者は、親しく付き合う人が、中国にいたときから知り合いの中国人に限定され、日本に移り住んでから、中国人、日本人に関わらず、新たな関係を形成していない人たちである。親しく付き合う人が中国のときから知り合いの中国人に限られるため、日本社会で生活するうえで必要なサービス、資源のネットワークからの調達がそうした範囲に限定されてしまう。それがかえって、「日本での生活全般の満足度」を低めているのではないだろうか。同様に、「日本での生活全般の満足度」を高めるような資源の調達は、日本で知り合い親しく付き合う中国人とのネットワークを通じて、困難なことがうかがえる。日本に移住してから、中国人との親密な紐帯が新たに形成されていることは、かれらにとって関係領域の広がりを意味する。とはいえ、中国人との関係領域の拡大も、回答者の生活満足度を高めるものとして機能していないのである。他方で、日本で知り合い親しく付き合う日本人が多いほ

ど、満足度も高い結果がでている。調査結果からは、「日本での生活全般の満足度」を高める効果をもつのは、親密な日本人とのネットワークなのである。

これまでの「移民」ネットワークの研究では、「移民」がホスト社会で生活を営むうえで、同じエスニック集団のメンバーとのネットワークの重要性が強調されてきた。それは、私的な生活の局面ばかりでなく（情緒的サポート、子どもの育児資源の調達）、公的な生活の局面（「移民」の政治参加、公的領域への意思表示）でも指摘されてきた。しかしながら、本研究では、その一部において、日本人との親密なネットワークの重要性を指摘する結果となった。

また、滞日中国人の生活満足度に対して、エスニックなネットワーク特性の効果を検出できたものの、その効果は、部分的なものにとどまっている。本研究では、「子育て満足度」、「夫婦関係満足度」、「余暇生活満足度」との関係を見たが、いずれも、エスニックなネットワーク特性の効果を検出することはできなかった。確かに、「日本社会での生活全般の満足度」は、測定内容からいえば、個別の生活局面の満足度を一定程度代表する変数である。しかし、エスニックなネットワーク特性の効果が、この変数に限定され、個別的な生活局面を表す変数に見られなかったことから、エスニックなネットワーク特性は、滞日中国人の多くの生活局面を規定する変数であるというよりは、一部に限定されたものであると考える方が妥当であろう。

分析結果の解釈によって、ネットワークにおけるエスニックな特性は、生活満足度に限定的な効果しか及ぼしておらず、一部では日本人との親密なネットワークの方が、生活満足度に形成効果をもつことが指摘された。しかし本研究は、重回帰分析の結果だけに依拠して、これまでの先行研究で強調されてきた同国人同士で結ばれるネットワークの重要性を一律に否定するものではない。これまでの研究では、ニューカマーの外国籍住民の

サポート・ネットワーク、親密なネットワークは、同国人同士や同じ出身地域、または文化、言語を共有するもの同士で結び結ばれており、そうした点から、エスニック・ネットワークの重要性が指摘されてきた。本研究が依拠するデータでも、単純集計 (N=121) では、親しく付き合う3人をあげてもらったとき、「3人とも中国人」という回答は、63.6%であり、日本人と親密なネットワークを形成する人は、3分の1にとどまっていることから、先行研究と同様の結果が得られている¹¹⁾。現状では、ニューカマーの外国籍住民の多くは、同国人を中心に結び結ばれているネットワークを利用して、サポート資源を調達しており、その点で、同国人ネットワークの重要性を否定するものではない。分析結果から言えることは、回答者の多くは、中国人だけで親しい関係を構成するものの、中国人だけと親しくても、日本人と親しい関係を構成しても、その関係からえられる生活満足度にさほど変わりはないということなのである。

(2) 構造的なネットワーク特性の効果

他方で、密度に目を転じると、「子育て満足度」、「余暇生活満足度」に対して有意な効果を及ぼしていた。これらの生活の局面については、密度がその度合いを左右する重要な要因であることが、明らかになった¹²⁾。これまでの移民研究をかんがみると、今後は、ネットワーク特性の中の構造的側面が、もっと注目されていいように思われる。その際に本研究では、ネットワーク構造を把握する指標として密度を取り上げたものの、密度はあくまでも、ネットワーク構造を把握する指標のうちの1つにすぎない。したがって、今後の研究の方向性としては、移民のネットワークの構造的複雑性にアプローチするにあたって、密度に限らず複数の立場から接近していくことが望まれる。

つぎに、密度が生活満足度ごとに異なる効果を及ぼしていた点について議論したい。調査結果では、子育て満足度の場合、密度が高いネットワー

クに包絡されている人ほど満足度が高く、余暇生活満足度については、密度が高いネットワークほど満足度が低い傾向が見られた。こうした結果になった背景に、次のことが考えられる。子育てという生活の局面でのサポートの調達を考えると、こうした事柄について他者とサポートの交換やサポートの調達を行うには、深い情緒的な関わりや接触が前提とされる。先に紹介したボットによれば、密度の高い緊密なネットワークは、ネットワーク内のメンバー間に規範的な合意を生みやすく、それが各メンバーに対し、相互に接触を保ち、援助しあう方向に圧力を加えるという。子育てや夫婦関係という局面においては、深い関わりを前提とする援助が必要とされるからこそ、密度の高い緊密なネットワークに包絡されている回答者ほど、満足度が高い傾向が見られたものと思われる。

他方で、余暇生活満足度の場合、ネットワークの密度が高いほどかえって満足度を低下させており、その背景には、おそらく、ネットワークの閉鎖性が関係しているものと思われる。余暇生活の場合、余暇についての情報と一緒に余暇を過ごす他者の存在が重要な意味を持つ。一般に密度が高いネットワークの場合、そのネットワークは同質的で、特定の関係領域にそのネットワークが閉じられている可能性がある。余暇生活の満足感を高めるものとして、たとえば、新たな他者との出会いがあるとする。そうすると、閉じられたネットワークのなかでは、常に同じ特定の他者ばかりと余暇を過ごすことになり、そうした関係構造のなかでは、かえって余暇生活の満足度を低めてしまうことは、容易に推察できる。

こうした密度と満足度との関係は、実は先に紹介した先行研究によっても、蓋然的にはあるがすでに指摘されている。エスニック・ネットワークは、生活上の便宜を図る上で、様々なサポート資源を提供するが、移民ネットワークへの過度の依存は、移民のホスト社会からの孤立化を招くという議論がそれである。本研究の場合、ネットワーク・メンバーのエスニシティに関わらず、ネットワークの構造によってそれが起こりうるという

ことが、分析結果から指摘されている。これまでの研究は、同国人同士のネットワーク形成に必然的にともなうものとして、閉鎖的なネットワーク構造を捉えていたわけであるが、エスニックなネットワーク特性とは異なる要素として、ネットワーク構造のもつ独自の効果に、今後は注目すべきではないだろうか。

(3) 在日外国人とネットワーク研究——本研究の制約、課題と今後の展望

本研究の知見を、再度要約すれば、どんな民族の人とネットワークを取り結んでいるかよりも、その人が取り結んでいるネットワークの形、緊密度のほうが、その人の生活満足度を左右しているということである。しかし、分析の結果得られた知見も、本研究が依拠するデータは、ランダム・サンプリングによって収集されたものではないため、今後はより代表性の高いデータによって、本研究で得られた知見を再度検証していく作業が必要となろう。

また、調査の結果得られた知見も、日本でホワイカカラー的な生活を可能にしている中国人であるからこそ、見られたものかもしれない。南米出身の日系人のように、派遣業者によってその生活全体を囲い込まれ、日常生活を閉鎖的なエスニック・ネットワークの内部で充足させている人にとっては、本調査の知見はあてはまらない可能性がある。その意味で、複数の出身地域の在日外国人との比較を視野に入れたネットワーク研究が、今後必要とされるのではないだろうか。

付 記

本研究の一部は、2000年度に財団法人家計経済研究所より受けている研究助成によって行われた。記して感謝したい。

註

- 1) 本研究は、劉曉丹（調査当時慶應義塾大学大学院）、坪谷美欧子（立教大学大学院）との共同研究の成果である。
- 2) ネットワークに直接言及したものではないが、「制度的網羅性」の高いエスニック・コミュニティに居住するものほど、ホスト社会の成員とのネットワークを持たない傾向にあるというブルトンの指摘がある (Breton 1964). また、ショーエンバーグは、エスニック組織の形成と維持は、セグリゲーションの指標であり、統合の障壁として捉えられるとしている。受入社会の制度に代替するものをエスニック集団が用意することで、社会的セグリゲーションは維持・促進されるという (Schoeneberg 1985).
- 3) たとえば、レイトン-ヘンリーがある (Layton-Henry 1990). また、日本における自立的な組織形成と政治参加との関連に注目したものとして、樋口直人と高橋幸恵 (1998) がある。拙稿でも、日本における外国人住民の組織への参加とネットワークとの関連について検討している (竹ノ下 2000).
- 4) また、広田康生の研究では、日系南米人のネットワークの「結び目」となるさまざまな施設、団体の持つ意味に注目し、かれらの生き方に情動的に共感し、「共振する」人たちの重要性が指摘されている (広田 1997: 79-123).
- 5) ネットワークとソーシャル・サポートとの関連に注目する視点は、松田茂樹 (2000a, 2000b) に大きな示唆をえている。
- 6) ソーシャル・サポート研究を概観するにあたっては、稲葉・浦・南 (1987) や Barrera (1986) を参照した。
- 7) 本研究は、ネットワーク構造と生活満足度との関連を見ると、その両者を架橋する媒介変数を直接取り上げていない。たとえば、先のウェルマンとガリアの研究は、ネットワークの特性は、サポート資源に影響を与え、サポート資源も含むパーソナル・ネットワークは、ストレスの発生、問題への定義や対処、本人の健康状況に影響するというモデルを構築しており、これだけを見ても、パーソナル・ネットワークとウェルビーイングとの関係は、複雑であることが分かる。また、これらの媒介過程にかんする多くの研究成果を整理したものとして、バレラを参照した (Barrera 1986).
- 8) 本調査は、ニューカマーの中国大陸出身者である滞日中国人の家族生活と社会的ネットワークの様相を明らかにするために、竹ノ下弘久、坪谷美欧子、劉曉丹によって行われた。
- 9) 本調査に協力してくれた団体として、子どもをもつ中国人の母親によって組

織される「母の会」,「日本僑報」という雑誌が主催する交流会である「永住会」,メンバーの多くが,留学を経て,現在日本の会社に勤めている人たちから構成される「全日本在職中国留学人員聯誼会」,各大学の中国人留学生学友会で構成される「全日本中国留学生学友会」,滞日中国人の子どもたちを対象に開かれる3つの学習塾,等がある。

- 10) 家族社会学で,夫婦関係や育児を従属変数にして統計的な検討をおこなうとき,男女別に分析を行うことが一般的である。しかし本研究では,サンプル数の制約から,「子育て満足度」,「夫婦関係満足度」を分析するにあたって,男女別の分析を行わずに,「性別」をコントロール変数として投入するにとどめた。
- 11) ただし,本調査は,滞日中国人が関連する団体を介して行われており,そういう団体への参加によって同国人と知り合う機会が多いために,同国人と親しく付き合う者が多い結果となっているとも考えられる。
- 12) 移民のネットワーク構造に注目する研究として,Anwar (1995)の研究がある。そこでは,イギリスに居住するパキスタン人16人を対象に,世帯外に展開する親密なネットワークの規模と,抽出されたネットワークにおけるノード間の紐帯に焦点が当てられ,密度の算出が行われている。しかしながら,この研究では,かれらのトータル・ネットワークの把握が重視され,測定された密度が説明要因としていかなる効果をもっているのかについての議論は行われていない。

参考文献一覧

- Anwar, Muhammad, 1995, "Social Networks of Pakistanis in the UK: A Re-evaluation", Alisdair Rogers and Steven Vertovec, *The Urban Context: Ethnicity, Social Networks and Situational Analysis*, Washington D. C.: Berg Publishers.
- Barrera, Manuel, Jr., 1986, "Distinctions between Social Support Concepts, Measures, and Models", *American Journal of Community Psychology*, 14(4): 413-445.
- Bott, Elizabeth, 1971, *Family and Social Network*, New York: Free Press.
- Boyd, Monica, 1989, "Family and Personal Networks in International Migration: Recent Developments and New Agendas", *International Migration Review*, 23(3): 638-670.
- Breton, Raymond, 1964, "Institutional Completeness of Ethnic Communities

- and the Personal Relations of Immigrants", *American Journal of Sociology*, 70: 193-205.
- Castles, Stephen and Mark J. Miller, 1993, *The Age of Migration: International Population Movements in the Modern World*, London: Macmillan. (= 1996, 関根政美・関根薫訳『国際移民の時代』名古屋大学出版会.)
- Hall, Alan and Barry Wellman, 1985, "Social Networks and Social Support", Sheldon Cohen and S. Leonard Syme, *Social Support and Health*, Orland: Academic Press.
- 樋口直人・高橋幸恵 1998「エスニック・サブカルチャーから市民参加へ?——ニューカマー外国人による政治参加の条件」『年報社会学論集』第11号: 83-94.
- 広田康生 1997『エスニシティと都市』有信堂.
- 稲葉昭英・浦 光博・南 隆男 1987「『ソーシャル・サポート』研究の現状と課題」『哲学』第85集: 109-149.
- 伊藤泰郎 1997「中国人就学生の生活とネットワーク」『北海道大学文学部紀要』45(3): 1-20.
- 川崎市外国籍市民意識実態調査研究委員会 1993「川崎市外国籍市民意識実態調査報告書」駒井洋編 1995『外国人定住問題資料集成』明石書店.
- コガ, エウニセ A. イシカワ 1997「日本における日系ブラジル人ネットワークの役割——浜松市・豊橋市の調査を中心に」『Sociology Today』7号: 76-83.
- Koser, Khalid, 1997, "Social Networks and the Asylum Cycle: The Case of *Iranians in the Netherlands*", *International Migration Review*, 31 (3): 591-611.
- Massey, D. et al., 1987, *Return to Aztlan: The Social Process of International Migration from Western Mexico*, Berkley: University of California Press.
- 松田茂樹 2000a「ネットワークの中で育児をすること」『LDI REPORT』2000. 4.
- 松田茂樹 2000b「育児ネットワークのソーシャル・サポート力」日本社会学会大会報告資料(広島国際学院大学).
- 松本 康 1995「現代都市の変容とコミュニティ, ネットワーク」松本康編『増殖するネットワーク』ミネルヴァ書房.
- 野沢慎司 1995「パーソナル・ネットワークの中の夫婦関係」松本康編『増殖するネットワーク』ミネルヴァ書房.
- 野沢慎司 1996「社交圏の変容とコミュニティ——社会的ネットワークの地域性

と夫婦関係——」『静岡大学人文論集』47-1号.

Schoeneberg, Ulrike, 1985, "Participation in Ethnic Associations: The Case of Immigrants in West Germany", *International Migration Review*, 19(3).

田嶋淳子 1998『世界都市東京のアジア系移住者』学文社.

竹ノ下弘久 2000「外国人市民の団体参加活動とその意義」宮島喬編『外国人市民と政治参加』有信堂.

都築くるみ 1995「地方産業都市とエスニシティ」松本康編『増殖するネットワーク』ミネルヴァ書房.

Wellman, Barry and Milena Gulia, 1999, "The network Basis of Social Support: A Network is More Than the Sum of its Ties", Barry Wellman ed., *Networks in the Global Village: Life in Contemporary Communities*, Colorado: Westview Press.

安田 雪 1997『ネットワーク分析』新曜社.